中之島フェスティバルタワー

レリーフ製作プロジェクト

これから
の
百年を考える

「牧神、音楽を楽しむの図」

OTSUKA OHMI CERAMICS CO.,LTD.

― 目次 ―

「旧レリーフ」から「新レリーフ」へ ―― 第Ⅰ回

「新レリーフ」製作検討 1 ―― 第Ⅱ回

「新レリーフ」製作検討 2 ―― 第Ⅲ回

本製作 1 ―― 第Ⅳ回

本製作 2 ―― 第Ⅴ回

取付工事 ―― 第Ⅵ回

完成 ―― 第Ⅶ回

【 中之島フェスティバルタワー　建物工事概要 】

事業主：朝日新聞社
設　計：日建設計
施　工：竹中工務店
工　期：2010(H22).1 月～ 2012(H24) 秋
所在地：大阪市北区中之島 2-22（地番）

階　数：地上 39 階（うち塔屋 2 階）、
　　地下 3 階
高　さ：200m
建物用途：事務所・ホール・店舗等
延べ面積：約 14 万 6,000 ㎡

© OTSUKA OHMI CERAMICS CO.,LTD.

©OTSUKA OHMI CERAMICS CO.,LTD.

第V回 本製作 2

目地確認から焼成、敷き並べ（夏〜春）

レリーフの新たな表情

彫塑が終わり、表面テクスチュアを入れると、巨大な彫刻の完成です。作業場の天窓から光が射し込むと、レリーフの滑らかな稜線が映え、それは美しいものでした。これまでの作業も、ここへ来てようやく報われた気がします。

■ 表面テクスチュア作業後、サインを入れる監修の先生方
（左から：建畠先生／建畠先生サイン／鷹尾先生／鷹尾先生サイン）

いよいよ焼成、といきたいところなのですが…そう簡単にはいきません。焼成に入る前に、レリーフを構成するピース各々を、目地幅 20 ㎜ずつあけ、敷き並べる作業が必要でした。彫塑、テクスチュア作業の段階で、叩いたり、撫でたりすることで、表面的には目地が見えなくなっていきます。それを元の目地の部分で切り離し、各ピースの側面を押さえて小口を整えるなど、ひとつひとつ丁寧に仕上げた後、再び目地幅分をあけた状態で敷き並べていくのです。目地の見えない滑らかな美しさから一変、目地をあけ、敷き並べたレリーフたちには、勇ましく力強い新たな表情が浮かんでいました。

■ 元の目地の部分で切り離していく

■ 切り離した後、各ピースの側面を押さえ、整える

©OTSUKA OHMI CERAMICS CO.,LTD.

■ ばらしたピースを目地幅 20 ㎜空け、再び敷き並べる

■ 敷き並べ完了「牧神（鳥）」

目地確認と修正

目地をあけない状態で彫塑をし、一度仕上げをしています。そこから目地幅 20 ㎜ずつあけると、周囲のアウトラインや彫塑した稜線などは、当然形状があわなくなってきます。目地をあけて敷き並べた後、ふたたび全体を俯瞰しながら、修正を行っていきました。

■「月」 形状の確認、ずれが大きい部分の修正

■「牧神（鳥）」 形状の確認、ずれが大きい部分の修正

©OTSUKA OHMI CERAMICS CO.,LTD.

特に牧神の顔の部分は、目地をあけることによりずれが生じ、バランスが崩れたため、ふたたび鼻の位置をずらしたり、目を入れ直すなどの作業も行われました。この状態で監修者の先生に再度監修をいただき、ようやく彫塑が完了いたしました。

■ 鼻の位置変更「牧神（鳥）」

■「牧神（鳥）」彫塑完了

裏グリ作業

監修を終えたレリーフは、均等に乾燥し、均等に焼き締まるよう、各ピースの厚みを一定（30 ㎜程度）にするために裏グリ作業（裏側から土を掘り出す作業）を行います。すでにレリーフは乾燥が始まっているので、土が固くなりすぎないうちに、作業を進めます。一方では、目地の間に入る設置金物を取り付けるため、また、外部からその金物を見えないようにするために、側面を少し凹状に削り込んだり、金物用の穴をあけるなどの作業も行っていきました。金物の取付図面についても、検証しながら並行して作成していきました。

■ 裏グリ作業と金物取付けのための作業

裏側から土を掘り出し、厚みを一定にしていく。また、金物取付用に側面を凹状に削り込んだり、所定の位置に穴をあけるなどの作業を行う。

©OTSUKA OHMI CERAMICS CO.,LTD.

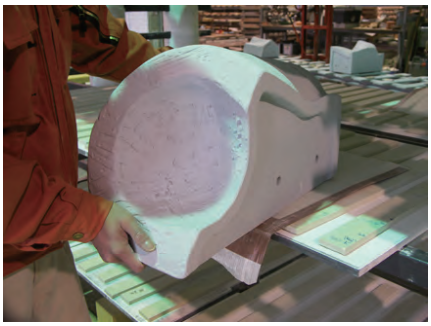
裏グリを終えたものから順に乾燥作業に入り、完全乾燥後、施釉の工程に移ります。監修者の先生方に決めていただいた青の釉薬を、手吹きにより均一に施していきました。

■ 乾燥

■ 施釉

いよいよ焼成へ

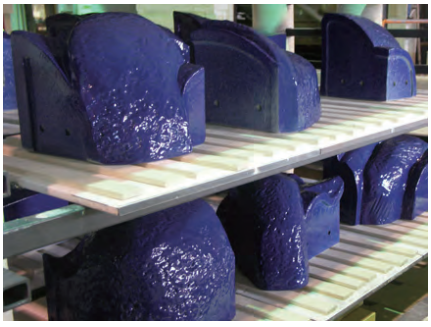
入念に検証してはいるものの、これだけ大きなピースを一度に焼くということには緊張感が走ります。これまで事業主や監修の先生方にも何度も足を運んでいただき、私たちも一つ一つ大切に仕上げてきたレリーフです。この焼成という工程により、土の塊だったものが焼きものとなり、50 年、100 年先まで受け継ぐことができる耐久性を備えるのです。



■ 窯づめ作業

試作時の検証を元にした、温度、ヒートカーブをプログラミングしたテラコッタ専用のシャトル窯に、所定のピース数量を入れ火入れをし、所定の温度まで上げて焼成します。その後、火を止め冷却に入り、窯を開けることのできる温度まで下がるのを待ちます。「うまく焼き上がるだろうか。」と、期待と不安が募りましたが、窯を開けてみるまではわかりません。

ようやく窯を開け対面したピースは、鮮やかな青が、瑞々しい光彩を放っていました。



■ 焼き上がり

焼成後の敷き並べ検品

焼き上がったレリーフは、再び敷き並べを行っていきます。大きな歪みはでなかったものの、各ピースの形状が異なるため、反ったり、逆に膨らんだりなど場所ごとにピースの形状にずれがでてきました。再度敷き並べて、どうしても目地が開きすぎるなど気になる点については、目地幅を狭めるためにピースを大きく作り替えるなどの作業が必要となりました。焼いてみないとわからない。それが焼き物の醍醐味であり面白さでもあります。

土の調土から、焼成後の敷き並べ検品をすべて終えるまで約１年半。ようやく６体全てのレリーフが完成し、いよいよ取付に入ることになりました。

■ 焼成後敷き並べ

協力（敬称略）：朝日新聞社／朝日ビルディング／
建畠朔弥／鷹尾俊一／建畠晢／
日建設計／竹中工務店

中之島フェスティバルタワー　http://www.asahi.com/festivaltower/

※ 当レポート内の画像及びその他内容の無断転載・転用を禁じます。